

まえがき

本書を手にとつていただき、誠にありがとうございます。

私は起業家でもないし、特別な才能があるわけでもない、普通の専業主婦です。

幼少期から、なぜ自分という存在がいるのか、なぜこの世界が存在するのか、ずっと疑問に思つて生きてきました。宇宙とは、神様とは、幽霊とは、人間とは……。誰も教えてくれる人がいなかったのです。私は風に聞いたり、木に聞いたりしました。返事が返つてこなかったので、おかしいなあと思つたのを覚えています。

私は共感覚を持つていて、空間に味覚を感じたり、数字には色がついて見えたり、時計を見れば顔が浮かび上がつて、何時かわからない！なんてこともありました。

人の顔は同じように見えていたので、色をつけて人を判断していました。人には2種類の色があつて、胸の中心にある色がその人の本質の色で、その周りの色が、雰囲気や気分が変わつていく、というもの

でした。ピンク色と黄色の柔らかな色の女性がいたのですが、中身の色が赤色だったので、芯が強く自分をしっかりと持った女性”ということがわかりました。

大変だったのは映画です。俳優さんたちの色がカットごとに変わるので、主人公や登場人物がわからなくなるからです。みんなどうやって映画を理解しているのか謎だったので、いろいろな人に聞いてみたら「普通わかるよね」と言われました。その言葉は私に刺さりました。私は普通ではないのだと思いました。ここから『普通になりたい』と思うようになりました。私がどうしたいとまではなく、普通はどうなのかというふうに考えるようになり、それを人にも求めるようになりました。

私は子どものころから早く大人になりたくて、ひとりで暮らしている自分を想像しては、ワクワクしていました。家庭環境はあまりよくなく、学校でも家でも居心地が悪かったです。

星空を眺めては『早く帰りたい』と思っていました。自己肯定感は低く、頑張れば頑張るほど空回りしていました。感受性が強く、周りの人の感情がわかってしまうので、自分の気持ちは後回し……。いつの間にか自分の感情というものがわからなくなっていました。

同年代の子どもより成長も早かった私は、コンプレックスを感じることも多かったです。大人と話す

と「大きいね」と必ず言われました。バスに乗り子ども料金を支払ったら、必ず年齢確認をされました。10歳のころ、生まれて間もない弟を抱いていたら、「若いお母さんね」と言われました。私が人生で初めて絶句したのはこのときです。とても敏感だったので、必要以上に傷つくことが多かったです。

人生の前半はつらかったことが多かったです。あのころの私は、自分と他人を比較し、いつも自分を見張り、責めていました。嫌なことには蓋をし、心の奥の底に沈めて、見ないふりをしていました。そして誰にも文句を言われないように、頑張って頑張りがつづけました。そんな日々を過ごしていたのでいつも疲れていました。

今思うと、あのころは本当に大変でした。稼いでも、なぜかすぐにお金はなくなるし、ひとつ問題を解決したかと思うと、すぐにまた別の試練がやってくる日々……。神様なんていないと思っていました。あれから数年、私は別人に生まれ変わりました。頑張っている。ことは同じなのに、引き寄せる現実と感情が、まったく違うのです。

本を出版することは私のひそかな夢でした。でも以前の私なら、なんの活動もしていない、なんの実績もない主婦が、本を出すなんてありえないと思っていました。でも、こうして私の夢は現実化してい

ます。

本書では、お金のことや病気のこと、夢の実現や見えない存在について、私なりの経験や考えを書きつづりました。最後までお読みいただければ幸いです。